
雛の恋

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雛の恋

【Nコード】

N3477R

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

白くふつくらとした頬に柔らかな笑みを浮かべて、お雛様は今日も笑う。優しい目元に、花の色をした唇。ぬばたまの黒髪に、儚げな白い手……。昔、一人の姫がおりました。

春花の章

白くふつくらとした頬に柔らかな笑みを浮かべて、お雛様は今日も笑う。優しい目元に、花の色をした唇。ぬばたまの黒髪に、儂げな白い手……。昔、一人の姫がおりました。

昔、一人の姫がおりました。

姫は大層美しく、当代一と謳われた絵師も、姫のお姿をお納めしようとした際、あまりのまばゆさに手が震え、絵筆をとることがかなわなかったと申します。

お顔の美しさもさることながら、姫は大層美しい手をしていらっしやいました。お袖の影からほんの少し覗いている指先は俗世間の穢れなど一つも知らない無垢な白色をしていて、その先に五つ整った爪は、はんなりと色づいて桜の色をしておりました。

姫の御父君は今を時めく左大臣様、母君はその北の方様で、その一の姫君でいらっしやったので、私たちは姫のことを、大姫様とお呼びしておりました。お二人とも姫を大層可愛がられ、大切に慈しんでお育てになりました。

「もし、その方」

私の呼び声で、庭の桜を眺めていた一人の男が振り返りました。切れ長な瞳の、背が高い男の方でございます。枯色の狩衣を、風流に着こなしております。

「何か御用でしょうか？」

少し低めのその声は、ざわつく春風の中でもよく通りました。男はちょうど姫より二つ、三つ年上位の若さで、おそらくは貴族の子弟であり、庭の桜に見とれて迷いこんでしまったと言ったところでしょう。突然声をかけられたにしては落ち着き払ったその態度が、妙に鼻につきます。

「先程からその桜を眺めていらつしやるご様子。もしお気に召したのであれば、一枝差し上げましょうかと姫様がおっしゃっています」
姫の乳兄弟であり、女房でもある私は、そのお言葉を外の男に伝えてやりました。

すると男は、見透かそうとするかのように、御簾の内をじつと眺めました。それから何も言わずに桜の木に近付き、手近な枝に手を伸ばします。パキリと乾いた音がして、今を盛りと咲き誇る桜の木が、その一枝を男の手の中に預けました。それからこちらに戻つて来ると、桜の枝先がほんの少し御簾の内に入るように置きました。私が驚いて目を見張り、顔を上げるのが、おそらく御簾の向こうの男にもわかつたのでしょう。彼は不敵ともとれる笑みを浮かべると、朗々とした口調でこう言いました。

「花は見る人が見てこそ価値が生まれるもの。この花は私のようなものではなく、姫君にこそ愛でていただくべきものなのでしょう」
なかなか小憎らしい返答をする男だな、と思いつつも、私は桜の枝をこちらに引き寄せて、姫様にお見せしました。それから、そのお言葉を男に伝えてやります。

「姫様が御礼を申し上げます、とおっしゃっておられます。それから、お名前をお伺いせよ、と」

「菅原高遠と申します。こちらに大姫様がいらつしやるとは存じ上げず、春の香りに誘われて迷いこんでしまいました。姫君にご迷惑がかからぬよう、早々に退散させていただきます」

高遠様はそれだけおっしゃると御簾の内に向かって深々と礼をし、歩き去ってしまわれました。

「菅原高遠様と申されますと、当代一の笛の名手と謳われる方ですよ？　一度お聞きしたかったわ」

「そうそう、あの涼しげな風貌と類まれな笛の音で、帝が何かと目をかけていらつしやる方ですわ！」

「あなたたち、何ですか、姫様の前で。はしたないですよ。それに、いくら帝が目をかけていらつしやるといっても、五位でしょう？」

うちの姫様とは全く釣り合わない身分の方じゃありませんか。軽々しく姫様に近付かないでいただきたいわ」

姫様は裳着は済ませたものの、未だに縁談は来ておりません。どの貴族の方も姫様の類稀な美しさの話は風の噂で聞き及んでいるのでしょうが、そのような美しい姫、ましてや左大臣家の姫ともなれば、いずれ女御として入内し、中宮となる運命にあると見て、初めから諦めているようでありました。それは姫様の入内を望む私や姫様の御父君からすればありがたいことなのですが、姫様ご自身は寂しく思いなのではないでしょうか。このような贈り物や、胸が躍るような恋文というものをもらうと、やはり嬉しいものなのではないでしょうか。

私は、隣に座しておられる姫様のお顔をそつと盗み見ました。いつものように白く俯きがちなお顔は、黒く豊かな絹糸の髪に隠れてよく見えませんでした。

白くふつくらとした指先がお袖の影からほんの少し顔を覗かせて、その爪先と同じ色の儂さの象徴を、愛おしむように撫でていらっしやいました。

春花の章（後書き）

北の方……正室、正妻

枯色……表地と裏地に緑色と黄色を重ねて、黄緑色に見せる重色目五位……殿上（天皇がいる清涼殿に上がること）が本来であれば許されない位。特別に許された人間であれば殿上が叶う。

こんにちは、霜月璃音です。

自宅に飾られた雛人形を眺めていて、ふと思いついたのがこのお話です。

このお話は、短期集中で書きあげてしまいたいと思っています。早く書いてしまわないと時期外れになるので……。どうぞよろしくお願いいたします。

夏蛭の章

それから季節がめぐり、夏がやって参りました。姫様はこの季節、お庭の遣り水の辺りを飛び交う蛭を眺めるのが好きでした。短い間に精一杯自分が生きた証を残そうとする姿がいじらしい、と……。

今日は、数匹の蛭がふわふわと御庭を漂っております。姫様はそれを眺めながら、そつと溜息をこぼされたのではないかと私は思いました。と言っても、姫様の桜の花びらを二つ押し当てたようなふつくりと美しい唇は、艶やかな扇の影に隠れてしまっておりませんが……。

ふと、庭の前栽の辺りがゆれて、御庭を飛び回っていた蛭が消えてしまいました。そしてその陰から、一人の男が姿を現しました。三日月の夜でしたので、はつきりと誰かはわかりませんでした。直衣を召していらつしやいますから、男の方だろうと判断できます。「いつぞやと同じく、夏の香りに惹かれてやって参りました。どうぞご容赦下さい」

その声は、菅原高遠様のものでした。今日は今年初めての蛭が見えた日で、姫様も大層お喜びになっておりましたのに、せつかくの蛭が身を潜めてしまったのですから、私はこの男に怒りを感じておりました。

「ふわりふわりと当てもなく彷徨うように見えた蛭が、こちらの御庭に誘われていくのを見たものですから」

「今年初めての蛭でしたからね。姫様もこちらからご覧になってましたよ」

しかし今はどうでしょうか。彼が庭に現われたその時から、蛭は一度も飛んではいません。つまりは、侵入者のせいで姫様のお楽しみが奪われてしまったと言うことです。

「これはこれは、まことに無粋なことをいたしました。お詫びにこの高遠、姫君のために一曲献じたいと思いますが、よろしいでしょ

うか」

さほど鈍くはないようでございます、私の嫌味にきちんと気付いたのですから。当代一の名手が笛を吹くのを間近で聞けるとあって、御簾の内の侍女たちは色めきたちました。姫様が頷くのを確認してから、私は高遠様の御言葉に答えて差し上げました。

「どうぞ」

正直私は、高遠様の笛の腕がどれほどのものか、存じておりませんでした。ただ、当代一と謳われる笛の名手です、きっと姫様のお気に召すだろう、と。そうすれば、せつかくの蛍が見られなくなっただけでもお忘れになるのではないかと考えていたのです。

しかし高遠様の笛の腕は、私の予想を遥かに超えるものでした。何と申しましょうか、その激しさは春の嵐のようであり、その優しさは夏のそよ風、その寂しさは紅葉を揺らす秋の風のようで、その厳しさは冬の木枯らしのようでありました。高遠様の笛には、聞く者の心を浮き立たせ、また、鎮める力がございました。私たちは高遠様の笛によって、春の野辺を駆け、夏の空を眺め、秋の山を歩き、冬の大地を踏みしめたのです。

ふと笛の音が止んで私たちが我に戻りますと、なんと、先程身を潜めてしまった蛍たちが、高遠様の笛の音に誘われて再び姿を現しました。ゆらりゆらりと儚げに揺れる蛍火が、高遠様の葵の色をした御直衣の辺りを漂います。それを眺めた高遠様は満足気に微笑まれました。そして、続きを吹かれます。蛍たちはまるで、高遠様の笛の音に合わせて舞っているようにも見えました。

そしてさらに驚いたことに、人に聞かれるのを嫌い、人前では楽器に御手を触れることもない姫様が、高遠様の笛の音に合わせて琴を弾かれました。姫様も大層な琴の弾き手でいらっしゃるのですね。で、私たちはしばし、極楽浄土にでもいるかのような心地で御二人が奏でられる世界に身を浸しておりました。

「今宵はこれにて御許しを。姫君の琴の音の素晴らしさに、この高

遠、普段よりも緊張してしまいました」

高遠様はそうおっしゃると、笛を懷にしまわれました。それから私は、姫様から高遠様への御言葉を賜りました。

「姫様は高遠様との合奏を大層楽しまれたようです。御礼に何か差し上げたいとの御言葉ですが、いかがでしょうか？」

私がそう御尋ねいたしますと、高遠様は首を横に振られました。それから、まだ御庭を漂っている螢火に目を向けられます。

「私の方こそ、このように刺激的な合奏は久々のことでございました。今でもまだ、姫君の琴の音に遅れまいとしていた震えが残っております。どうぞご容赦下さい」

高遠様はそうおっしゃると、また依然と同じように御簾の内に向かって深々と礼をされて、歩き去ってしまわれました。

その高遠様の後ろ姿を見送られる姫様の御手は、青白い三日月、儂げな螢火に照らされて、微かに震えていらっやいました。

今思えば、あの合奏の時に御二人の心は通じてしまったのかも知れません。しかしそれは、儂く悲しい恋の道でございました。

夏蚩の章（後書き）

葵……紫と水色を重ねて、灰色がかった青の色を出す重

秋風の章

姫様が愛でられた蛭たちも姿を消してしまい、御庭の桜の枝もその葉を燃えるような紅に変える秋がやって参りました。遣り水の上に浮かぶ銀杏や紅葉の葉が色とりどりの錦のようで、はらりと舞い落ちる葉の儚さにも風情が感じられます。

「まあ、姫様。素敵ですわ。まるで雛あそびのお人形のようにです」
侍女の一人の言葉に、私は思わず眉を顰めました。姫様に対してお人形のようにです、などと言うのは、はなはだ無礼なのではないかと思ったのです。

しかし私はそれと同時に、その侍女の言葉にひどく納得してしまつたのです。人のものとは思われぬ程の美貌に、時折どこか儚い、寂しげなご様子でいらつしやる姫様の印象は、私の中で雛あそびのお人形とびたりと重なつてしまつたのです。

姫様はそんな侍女をとがめる様子もなく、ただぼうつと、御庭を眺めていらつしやいました。その視線の先に何があつたのかは、私のような者にははかり知れません。

今日は、女御として入内されることが決まつた姫様のための、御道具や御衣装を用意しております。金銀艶やかな御衣装に扇、華やかに彩られた貝合わせの御道具に、気品漂う御道具の数々。どれも当代一の名工に作らせた、贅の限りを尽くしたものでございます。一つひとつ手にとつて確認する度に、私たちは思わず感嘆の溜息をもらしてしまいました。

そろそろ全ての御道具の確認が終わるかと思つた頃でございます、ふと姫様が小さく息を漏らされて、軽く瞼を震わせました。そしてその視線の先には、菅原高遠様の御姿があつたのです。

「こちらの姫君が入内されるとお聞きしてやって参りましたが、果たしてその噂は真実なのでしょうか？ 思うところもありまして、どうしてもその噂を信じられないであります」

そう切羽詰まった声音でおっしゃると、高遠様はじりりと一步、こちらに足を踏み出されました。その足元で、砂が鈍い音を立てます。長かった秋の夕暮れも終わり、次第に辺りを薄暗闇が包み始めました。

「高遠様がお耳にされたように、姫様の入内が決定いたしました。ただいま、陰陽師に吉日を占わせております」

私の言葉で、高遠様がぴくりとその身を震わせました。それから、拳を強く握りしめ、俯かれます。その直後でした。

バサッ！

「な、何をなさるのですか、高遠様！」

なんと高遠様は、あろうことか乱暴に廂に登って来ると、勢い良く御簾を払いのけて、母屋の中に入っただけです。まさか高遠様がこのような暴挙に出られるとは私たちも夢にも思っていなかったので、その時はひどく動揺してしまい、咄嗟に姫様の御姿をお隠しすることもありませんでした。

そして高遠様はそのままずんずんと無遠慮に奥に進まれると、あまりの恐ろしさに震えていらっしゃる姫様の御手を乱暴にお取りしたのです。

「あの夏の夜の合奏をお忘れですか？ 姫君！ あの溶け合うような楽の音を、よもお忘れではありませんまい！」

高遠様の剣幕に押されて、私たちの中に動ける者は一人もおりませんでした。姫様はかたかたと震えながらも、扇で御顔を隠していらっしゃいます。涼しい双眸に今日は怒りを滲ませて、高遠様は姫様の御手を固く握りしめたまま続けられました。

「私にはあの時、はつきりとわかったのです！ ああ、この方こそ、私の運命の半身だと！ 私と姫君は比翼の鳥であり、連理の枝であるはず！ 姫君もそう感じられたはずでございましょう？」

そしてその直後、高遠様は姫様の御言葉を受けて硬直されました。姫様はこうおっしゃったのです。

「……私はお人形です。どうぞお忘れ下さい……」

なんと哀しく辛いお返事でございましょうか。この時の高遠様のご様子からは、心の臓を抉られるかのような激しい痛みというものを、容易に窺うことができました。私は恐る恐る、姫様の御顔を盗み見ました。おそらくは姫様も、高遠様と同じく、苦渋に満ちた御顔をされているのではないかと思っただからです。なぜなら姫様も、高遠様と深い江西で結びつけられているはずだということを、感じ取っておられたはずだからです。高遠様とお会いしていらつしやる時の姫様の御顔を拝見すれば、滅多に表情が変わることはなくとも、長年おそばで御仕えして来た私にはわかるのです。

しかし驚いたことに、姫様はこの時、無表情でいらつしやいました。普段から御顔を綻ばせたり、歪められたりということはまずなさいませんが、それでも私には、微細な変化を読み取ることができました。それなのに今日は、本当の無表情でいらつしやったのです。高遠様はしばらく、途方もない怒りに身を震わせていらつしやいました。これ以上の暴挙に出られては非常に困りますが、かと言って、人を呼んで姫様や高遠様の御名前に傷をつけるのも困ったことです。私たちがなすすべもなく、黙って御二人の様子を眺めておりますと、やがて高遠様は、乱暴に姫様の手を払われました。

「あなたと言う方は……！」

そう激しく哀しく一言呟かれると、高遠様はくるりと背を向けて御姿を消されました。先程の一言には、高遠様の万感の想いが込められていたように、おそばでお聞きしていた私には感じられました。しばらくの沈黙があり、虫の音が辺りに響き始める頃に、私たちはようやく、おそろしい出来事から解放されて、我に返りました。その時には姫様はひどく落ち着いていらつしやって、いつものように何か物憂げに御庭を眺めていらつしやいました。

「あの……」

姫様の侍女の一人が、このことを左大臣様にご報告すべきか否かを私に問いました。この方はまだ年若いせいか、そのようなことを姫様の前で平気で問われます。

「他言はしないで下さい。いいですね？」

そうです、何事もなく高遠様もお帰りになられたのですから、誰にも何も告げるべきではありません。ただ私たちが、ここでの出来事を胸の内に秘めておけばよいだけの話なのです。

姫様は相変わらずのご様子で、御庭を眺めていらっしゃいます。

高遠様がいつもいらっしゃる場所を、ずっと……。

虫の音はいよいよ盛んになり、まるで高遠様の想いに答えようとするかのようでございました。

姫様がおっしゃった御言葉には、一体どのような意味があるのでしょうか。高貴な方のおっしゃることは、私のような者には推し量ることもできません。そう、その視線の先にあるものが推し量れないのと、同じように……。

秋風の章（後書き）

貝合わせ……平安時代の物合わせの一種で、美しさや珍しさを競うもの

冬雨の章

あの恐ろしい秋の晩からは何事もなく日々が過ぎ、本日、私たちは無事に姫様の入内の日を迎えました。姫様は梨壺に一室を賜うことになりました、梨壺の女御様になりました。そして、なんと帝御自ら姫様を迎え入れて下さったのです。何でも、姫様の噂をあちこちからお聞きになっていらして、入内の日を心待ちにされていたということでございます。

「女御は大変美しい手をしていらつしやる」

帝はそうおっしゃって姫様の手をお取りになり、優しく包み込まれました。白くふつくらとした指の先にある薄桃色の部分が、今日はやけに虚しく見えます。はて、なぜでしょうか。冬の澄んだ星空を二つ切り取ったかのような美しい黒眼も、ただそこにぽっかりと闇があるだけでございました。しかし帝はそんな姫様のご様子に気付けられることもなく続けられます。

「あなたがいらつしやる日を指折り数えて待ち望んでおりました。

私たちはこれから、比翼の鳥、連理の枝となつて、ともに生きてまいりましょう」

「……はい……」

私はこの時、姫様は別の誰かの言葉、おそらくは、あの夜の高遠様の御言葉にお答えになったのではないかと思いました。姫様が御口の中で小さく、高遠様の御名前をお呼びした気がしたのでございます。気のせいであつて欲しい、と思いました。女御となられた姫様の御口から帝以外の御名前が漏れるなど、決してあつてはならないことでございます。私はそつと、姫様のお顔を拝しました。

この国で最も美しい花、桜と同じ色をした唇は、ふつくらと柔らかく笑みを浮かべていて、姫様は、大層優しく微笑んでおられました。

しかし、やはりその瞳の奥には、悲しみという名の闇が渦巻いて

いたのでございます。

姫様が入内されてから、一月が経ちました。帝のご寵愛も大変深いようでした、私たちは大変安堵いたしました。帝の御隣で微笑まれる姫様も幸福そうで、御二人の御姿を拝する歡びはひとしおでございます。

しかし、私たちは一つ、姫様に隠し事をいたしております。

菅原高遠様が、湖に身を捨てて亡くなられたというのです。今は御幸せなご様子でいらっしゃる姫様に、できるかぎり心痛などというものからは遠ざかっていただきたいと私たちは考えました。そして、このことは姫様にはお聞かせしないと決めたのです。

しかし、宮中にもやはり口さがない方がいらっしゃるようです。どなたかがそのお話を公達からお聞きして来て、なんと、姫様の御耳に入れてしまったのでございます。

「……高遠様が亡くなられた、とお聞きしたのですが……」

ある日姫様は、何気ないご様子で私にそう問われました。ぴゅうぴゅうと木枯らしが吹く、寒い冬の昼のことでございます。私は、何とお答えしようか迷いました。嘘をつくということは、姫様に御仕えする侍女として禁忌でございます。しかし、あの事実をそのままお伝えした時の姫様のご心痛を思いますと、とても私には真実をお伝えすることはできそうにありません。

「亡くなられたの、ですね……」

私の沈黙は事実をお伝えすべきか否か迷っているのだということに姫様は感じ取られて、そう、呟かれました。そうなりますと、私にはもはや、真実をお伝えするという選択肢しか残されておりませんでした。

「はい……先月の三日に、亡くなられたそうでございます……」

私の言葉をお聞きになって、姫様は軽く目を見張られました。そうです、先月の三日というのは、姫様が入内された日だったのです。白く優しい指先が、木枯らしによる冷えのせい、小刻みに震え

始めました。次第に震えは大きくなり、今度は姫様の肩が震え始めました。そして。

冷たい雨が、降り始めました。ぽつり、ぽつりと廂を打ち、屋根を打ち、障子を打ちます。私は、慌てて雨戸を下ろしました。そして、姫様の御膝にも、温かい滴がぽつり、ぽつりとこぼれておりました。そうです、姫様もまた、涙を流しておられたのです。

「そう、ですか……」

後にも先にも、私が姫様の涙を見たのは、この時だけでございました。高遠様を失われたことで、姫様もまた、心に深い傷を負われたのでございます。姫様を失ったことによって、高遠様が傷を負われたのと同じように……。姫様も、それだけ深く高遠様のことを想っていらしたのです。

しかし、人よりも優しい御心をお持ちになっけいらつしやる姫様は、ここぞというところで我儘をおつしやれなかつたのでございます。姫様の入内を心待ちにしていた私たちや、姫様の御父君、御母君のことを考えて、高遠様にあのような御返事をされたのでございます。姫様は、本当にお人形のように入内されたのでございます。

そしてまた、人として愛された方を失われた痛みが、お人形であった姫様を、人に戻してしまつたのでございます……。

その雨はいつまでも降りやまず、いつまでも姫様の御心の寄り添うかのように、冷たく振り続けております。その雨音に紛れて、ふと懐かしい笛の音を聞いたような心地がいたしました……。

こうして雛人形は、人としての愛も、悲しみも、全てを押し隠して、今も柔らかな微笑んでいるのでございます……。昔、一人の姫がおりました……。

冬雨の章（後書き）

「雛の恋」はこのお話を持ちまして完結です。

まだ季節外れではないと信じたいと思います……。

短い連載でしたが、お付き合い下さった皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3477r/>

雛の恋

2011年3月6日23時56分発行